顕現後第７主日　　黄金律　　２０２２．２．２０．

今日の福音書に出てきた、「敵を愛しなさい」というテーマは、私たちが良く聞く言葉です。これはキリスト教の教えとして、大変有名になりました。大斎節を前にして、厳しい教えの箇所を選んで読ませるんだなあ、とこの聖書日課を決めた人には驚かされます。しかし、そんなつもりで読み進めてゆくと、今日の聖書の中に『人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい。』という、ちょっと格言めいた言葉が出てきます。これは、マタイ７：１２にも、同じような表現、『人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。』と書かれています。

律法と預言者というのは、ユダヤ人にとっては、聖書全体を指す言葉です。

教会は、この言葉を『黄金律』と呼んでいます。これを辞書で引くと

『黄金律（おうごんりつ、英: Golden Rule）は、多くの宗教、道徳や哲学で見出される「他人から自分にしてもらいたいと思うような行為を人に対してせよ」という内容の倫理学的言明である。現代の欧米において「黄金律」という時、一般にイエス・キリストの「為せ」という能動的なルールを指す。』

となっていて、いろんな宗教で少し表現は違いますが、教えられているものとして紹介されていました。

イエス・キリスト
「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」(『マタイによる福音書』7 章 12 節,『ルカによる福音書』6 章 31 節)
仏陀「自業自得果」(『正法念処経』)
孔子「己の欲せざるところ、他に施すことなかれ」(『論語』巻第八衛霊公第十五 二十四)
ユダヤ教「あなたにとって好ましくないことをあなたの隣人に対してするな。」(ダビデの末裔を称したファリサイ派のラビ、ヒルレルの言葉)、
「自分が嫌なことは、ほかのだれにもしてはならない」(『トビト記』4 章 15 節)
ヒンドゥー教「人が他人からしてもらいたくないと思ういかなることも他人にしてはいけない」(『マハーバーラタ』5:15:17)
イスラム教「自分が人から危害を受けたくなければ、誰にも危害を加えないことである。」(ムハンマドの遺言)

他の宗教が、「自分の嫌なことは、他人もいやなんだから、そんなことはするな。」と言っているのに対して、イエス様は積極的に、他人に関わってゆくことを勧めている点に特徴がありそうです。
この積極さが、今私たちには求められているように思います。

それで今日は、私がまだ神学生だった頃に体験した、印象深い出来事を話そうと思います。実はこの話は、いくつかの幼稚園でも話したことがある、非常に単純なお話です。私が神学校の３年生の時、学校の実習科目として、夏休みに立教大学の学生たちと一緒に３週間、フィリピンの山奥の村に行って、村の人たちと生活を共にするキャンプに参加した話です。

フィリピンのいくつかの村に分かれて１０日間くらい、日本人４人が村の人たちと一緒に農作業をしたり、学校で子どもたちに日本のことを教えたりしたのです。

ある日、私たちは村のおばさんたち数人と、農作業に行くことになりました。村は山の上の方にありますが、田んぼが歩いて３０分くらいの、山の下の方にあります。そこへは小さなあぜ道で石を並べた階段を下りながら歩いて行きました。下り道は楽に降りられます。

そして着いた田んぼは、稲が実っていました。そして実った稲穂は、フィリピンでは、日本とは違い、実った穂の部分だけを切ってゆくので、作業は立ったままで、腰を曲げることもなく簡単にできました。

ところがそれでおわりではありません。今度は稲刈りの終わった田んぼの土をひっくり返して、畝をつくり、その土の山に、おばさんたちが頭に巻きつけてきていた、芋の蔓を植えてゆくのです。稲刈りが終わった田んぼを芋畑にする二毛作ですね。これは、スコップで土をひっくり返して、とても疲れる作業でした。

仕事が終わるとそこでお弁当を食べるのですが、疲れてしまって、あまり食事は進みませんでした。しかし、本当に大変なのはその後です。

３０分かけて下った道を、今度は、疲れた体を引きずりながら、村まで登ってゆかなければなりません。一緒に作業した村のおばさんたちだって、軽々登るわけではありません。私たちは何度も途中で休みながら石を並べたような登り道を登って行くのです。

何度目の休憩だったでしょうか。私たちは少し水が流れている小川のほどりに腰をかけて休むことになりました。ところが一緒に行ったおばさんが私たちに、その小川に入るように促すのです。入っても、膝までもないくらいの浅い川ですが、そうすると急に、そのおばさんが私たちの足を洗いだしたのです。

最初は何が起こったのかわかりませんでした。ただこちらは言葉もわからず、疲れていたので抵抗する力もなく、洗われるままでした。しかし、洗ってもらううちに、気持ちよくなってきました。熱帯のフィリピン。その８月に、昼間泥だらけになった足は、相当な熱をもっていたのでしょう。それが小川の水で冷やされて、元気になって、その後も村まで歩いて帰ったのです。

さて、それで考えたのは、あのおばさんは、どうして私たちの足を洗ってくれたのか、という問題です。勿論、イエス様は十字架に架かる前の晩に弟子たちの足を洗い、『13:14 ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。』（ヨハネ１３：１４）と言われましたが、そんな単純なことではないでしょう。

私はあのおばさんが、これまで何度も村から農作業のために歩いてあの田んぼに行った、そんな生活を想像しました。村を出る時は元気でも、一生懸命働いて、帰る頃にはわたしたち同様ヘトヘトだったろうと思います。そして何度も休みながら帰って行った。ところが、ある時、小川の中に足を入れて、足を冷やすことになったのです。

一緒に農作業に行った先輩から促されて、私たちの時のように小川に入って洗ってもらったのか。それともたまたま疲れた時に、小川に足を入れてみたら気持ち良かったのか。いずれにしろ、このおばさんは、疲れた時、泥んこの、熱を持った足を小川の水につけたら、気持ちよくなり、疲れがとれて、元気を取り戻すことを知ったのです。

それで、それからは、毎回、農作業の帰りには、あそこで休む時には、足を洗ってから帰るようになった。それで、その体験を私たちにも伝えた、ということではないでしょうか。

自分が気持ちよくなり、元気にさせられたことを、今度は他人の私たちにも伝える。これが、今日の聖書の箇所でイエス様が言われた、黄金律、『人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい。』ということだと思います。

そして、マタイ聖句の方は、聖餐式で読まれることはないようなのですが、こちらで、続きの聖句も覚えておいた方がいいのではないか。

マタイ７：１２『人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。』

この聖句を、もっと別の言葉で言いたいと思います。

実は、この３週間のフィリピンキャンプのテーマとなっている言葉がありました。フィリピンの山奥のイゴロット語という独特の言葉ですが、「アディタコ　ボコダン　ディ　ガビス」（良いものを分かち合おう）という言葉ですが、本当に私はそれを、言葉もうまく通じないフィリピンのおばさんから教えられたのです。

私たちが他の人たちと共に、お互いの良い物を分かち合い、自分の良い体験を、他の人にも伝えられるものでありたいと思います。